

あの日の決断

岩手の経営者たち

貧しかった少年時代 農協断り実家に就農

酸性土壌の不毛の地。作物

は満足に育たず、生活は貧しかった。押し麦やヒエ、アワが主食で、夕食が1カ月近くトウモロコシだけということもあった。

8歳の時、父の今朝治さんが病死。一家の大黒柱の死で、上市和賀町後藤の西部開発農産3人きょうだいの長兄だった照井耕一さんは、必然的に稼ぎ手になった。

小学校の高学年になると、田植えや稲刈り時期は学校を休み、よその農家を手伝った。1週間働いて、5升(7・5キ)の米をもらった。照井家にとって、何よりのごちそう

西部開発農産

▷①◁

照井 耕一さん



「高校を卒業する時、俺は農業で生きると決めた」と語る照井耕一さん＝北上市和賀町後藤

だった。

中学の3年間は、春から秋まで地域の篤農家に住み込んで。毎朝3時半に起き、農作業の準備をしてから登校し、お金がなく、実家で飼う乳牛の餌入れ袋を破いて、かた。ばんだわりにした。

ばんだわりにした。

たかった。農業高校への進学を希望したが、貧しいゆえの壁があった。中卒で出稼ぎに出る者も多かった時代。「高校に進むなら生活保護は打ち切る。学費を自分で賄うならいい」が役所のルールだった。

たかった。

「女だけ働かせるのは嫌。食べ物を作れば、おふくろが安心する。食べ物の大切さは体に染みついていて」。18歳の春、農地4畝と乳牛2頭の

た。自分は毎日やっていたから、先生が褒めてくれたし、頼りにしてくれた」。評価は、勉強への意欲につながった。推薦するから農協に行け。

篤農家に「あと3年使ってほしい」と頭を下げた。中学時代と同様、親元を離れ、自転車で片道45分の北上農高に通った。

勉強の成績は悪くても、得意分野があった。米作りや牛豚の世話。「農業高校でも農業を知らない生徒が多かつ

つながった。〈2面に続く〉

北上市和賀町後藤の西部開発農産は、作付面積約70畝(本年度計画)を誇る国内有数の農業法人。創業者社長で2年前まで会長を務めた照井耕一さん(74)が食料を作る尊さを胸に、地域の農地を守る続けてきた結果が、現在の大規模経営につながった。土地の有効利用や作業の効率化、畜産、除害など多角化を推進。「現場主義」を貫き、若い農業者の育成にも心を砕いてきた。常に土に生きてきた照井さんの歩み、農業経営者としての決断を伝える。

(5回続き)